

関西の文化力向上



大竹伸一氏
西日本電信電話
代表取締役社長



小出英詞氏
住吉大社権禰宣



近藤誠一氏
文化庁長官



鳥井信吾氏
サントリーホールディングス
代表取締役副社長
(50音順)



コーディネーター
堀井良殷氏
関西・大阪21世紀協会
理事長

Session

2

長い歴史のなかで連綿と培われてきた関西の文化を、
守り、育て、社会の活力の源泉とするためには、
いま何を考え、どう行動するべきか。
過去の教訓や海外の文化施策などから、
その答えを探った。

文化・芸術の六つの力

堀井 日本の伝統文化の多くは関西で発祥し、今なお残されているのも関西です。にもかかわらず最近とくに大阪においては、こうした文化の危機的状況を日々見聞します。文化を培うには長い年月が必要ですが、潰そうと思えば一瞬で潰れてしまいます。だからこそ文化を絶えず論じて育てていかなければなりません。パネリストの皆さんは、現在の日本とりわけ関西の文化状況についてどのような課題意識をお持ちでしょうか。

大竹 経済界はこれまで、文化と経済は別個のものであると捉えてきました。しかしそれでは文化力は向上しません。文化を生活に根ざしたのものとして経済活動とセットで考えるべきだと思います。そうした『文化経済大国』の実現に向けた戦略的な取り組みによって、日本の新しい価値が創造されると思います。関西はその拠点になるでしょう。

鳥井 私は関西経済同友会の歴史・文化振興委員会で、文化による大阪の活性化について調査・研究をしています。その観点で言えば、日本の文化の根源には、マハティール元首相が基調講演でおっしゃった通り、勤勉さと規律正しさ、高い労働倫理があると思います。

小出 住吉大社の1800年にわたる歴史は、単に一つの神社の歴史ではなく、関西・大阪の歴史の一部でもあります。まずはそれを再認識していただき、大阪の伝統文化である「お祭り」を文化振興に役立ててはどうかと考えます。

堀井 本日は東京から近藤誠一文化庁長官にお越しいただきました。近藤長官は、外交官としての長いご経験をお持ちです。外国と日本の文化に対する取り組みについてどのようにお考えでしょうか。

近藤 私は38年半の外交官生活を終え、1年半前に文化庁へまいりました。この約40年間のうち、半分が外国、半分が日本で生活してきました。本日は、文化庁長官としての建前ではなく、そうした40年間の社会人人生で深く感じたことをお話しいたします。

経済成長や安全保障による国の繁栄は大事なことです。それは精神的な豊かさを楽しむための条件整備であり、手段に過ぎません。ところが戦後日本は、経済的に成功して「ジャパン アズ ナンバーワン」と言われたがために、経済成

長自体が目的化してしまいました。バブル崩壊後もその考えを切り替えることができず、今日に至っていると思います。そうして世界第3位の経済大国となり、安全を手に入れて、精神的な豊かさを追求する条件が揃ったにもかかわらず、そのために必要な、子どもたちに芸術の素晴らしさを教え、文化の力を自分の力にする仕組みをつくることを怠ってきた。その結果、人々の生活に文化・芸術が十分に位置付けられず、経済が停滞しているという理由だけで、日本人は必要以上に元気を失ってしまいました。

文化・芸術には六つの素晴らしい力があります。一つめは感動や悩み、祈り、感謝の念などを表現し、それを他人と共有する力です。ある文化人類学者よれば、ネアンデルタール人が減んだ原因は、自分の気持を表現できず仲間とうまくコミュニケーションできなかったからだそうです。

二つめは、芸術に感動することで生きる力と希望が得られることです。分子生物学の大家である筑波大学の村上和雄名誉教授によれば、物事に感動することで良い遺伝子が目覚め、病気を治す力が湧いてくるそうです。アメリカの糖尿病学会でも、笑うことで糖尿病患者の血糖値が下がることが証明され、注目されています。

三つめは、芸術が社会の統合の力になることです。私はロンドンでシェイクスピア劇の『リア王』を観て、リア王役の黒人俳優の演技に感動した経験があります。ブレア元首相は、アフリカなど旧植民地から移民を受け入れるにあたって、芸術分野での活躍を奨励しました。移民のなかには英語が多少苦手でもダンスや歌、演技などでは一般のイギリス人よりはるかに優れた人がたくさんいる。イギリスでは、そういう人たちを芸術の世界に参加させることで彼らに生き甲斐を与え、かつ国の文化力をも高めているんです。

四つめは、芸術には固定観念や既成概念を突破する力があることです。芸術は政治や経済と違って既存の枠にとらわれません。日本の政治家や経済人、官僚は、こうした芸術的センスを見做って新しい発想を追求すべきです。

五つめは、芸術を通して、産業や地域振興に必要なイノベーション能力が養われることです。ノーベル化学賞を受賞した野依良治博士は、「ノーベル賞を取ろうと思ったら、学術の積み上げだけじゃだめで、芸術をやってひらめきを覚えなさい」という主旨の話をされています。

六つめは、ソフトパワーとして国のイメージを上げることです。日本のアニメが海外で高い人気を得て、文化外交に寄与しているのはその好例です。

『和魂和才』を生かす

堀井 近藤長官のおっしゃる通り、経済的な豊かさは手段であって目的ではないんですね。大竹さんは先ほど文化経済大国を目指そうと言われましたが、それについてもう少し



近藤誠一氏

し詳しくお聞かせください。

大竹 大量生産・大量消費という欧米型の経済成長モデルは、すでに行き詰まりの感があります。そこで日本文化独自の強み、つまり日本人の心と技である『和魂和才』を生かした日本発の新たな経済成長モデルとなるのが、『文化経済大国』の考え方です。東日本大震災では、日本人の冷静さや忍耐、協調性といった精神が世界各国から称讃されました。こうした『和魂』と、創意工夫やおもてなし力などの『和才』を生かして心の豊かさを実現することが、今後の経済成長を牽引し、グローバリズムの中で日本の価値を高めることにつながるでしょう。

具体的には、海外へ陶磁器や染織品などの有形文化を輸出したり、和食や時間を守る習慣といった無形文化にも共感を得ることで、日本流の生活様式を世界に広めることができると考えます。実際、「もったいない」という『和魂』がリサイクルや省エネ、保存食などのビジネスを生み、「繊細」「器用」などの『和魂』が融合することで「ものづくり力」といった『和才』が生まれ、軽自動車やカメラなどの小型軽量化を実現し



大竹伸一氏

ました。こうしたことは日本に限ったことではありません。アメリカではジーンズやハンバーガーなど、イギリスでは英語という言語やゴルフなど、自国文化を経済活動に取り入れ世界に発信することで経済発展をもたらし、国際的な地位の向上にもつなげているのです。

堀井 大竹さんのお話を聞いて、梅棹忠夫さんが生前、「これからの日本

は、日本文明を世界に広めていくという使命感をもつべきだ」とおっしゃったことを思い出しました。われわれが当たり前のように思っている暮らしは、じつは世界の人々が憧れる魅力的な暮らしなんだと。

さて、日本は明治以降、『和魂洋才』を掲げて今日の繁栄を築いてきましたが、洋才にばかり走って和魂を忘れたところに今日の閉塞感があると思います。そして和魂と言えば、そもそもその発するところは住吉大社に行き着くのです。

日本人のアイデンティティ

小出 『和魂洋才』の考えは、菅原道真が大和心をもって唐国の文物を取り入れることを『和魂漢才』と表現したことがはじまりです。この精神を体現したのが遣唐使で、彼らは住吉大社で祈願したのち、大阪湾から船で旅立っていきました。記録によれば、この遣唐使船のなかには、住吉神社を

設えて神職も同乗したとあります。大陸の進んだ文明を取り入れる国家プロジェクトに臨んで、日本人のアイデンティティである神を祀っていたというのは大変重要な意味をもって



小出英詞氏

います。遣唐使による大陸との交流がなくなった後、住吉明神は和歌・文学の神としても親しまれるようにな

りました。例えば源氏物語は、その核心部分が住吉信仰で成り立っています。都落ちした光源氏は、再び中央政界に復帰すべく住吉明神に誓いを立て、そのお礼参りとして壮大な住吉詣でを行っています。伊勢物語にも登場し、古今和歌集には「すみのえの」とか「すみよしの」と付く歌が数多く見られます。また、かつて結婚式には付きものだった謡曲『高砂』では「はや住之江に着きにけり」と謡われ、「逢ひに相生(あいおい)の松こそめでたかりけれ」と、松の葉のように夫婦が生涯添いとげること寿ぐ相生の思想もここから生まれました。

住吉大社は伊勢神宮と同じく20年に1度の式年遷宮制度があり、その際、当社のシンボルでもある太鼓橋は代々船大工が架け替える伝統があります。つまり八百八橋といわれた大阪の築橋は船大工の技術に負うところが大きく、その意味でも住吉大社は水の都・大阪とゆかりが深い。このように、大阪で「外交」「文化」「水の都」というキーワードを掘り下げていけば、住吉大社にいたるのです。

堀井 大阪には住吉大社をはじめ、神武天皇の時代からある生國魂神社や聖徳太子が建てた四天王寺など、数々の歴史遺産が現存します。そうした日本人の心に深く根ざした精神性を生かすことが大事だと思います。歴史を生かしたまちづくりを提唱する関西経済同友会 歴史・文化振興委員会では、2011年9月、イギリス・スコットランドの歴史を生かしたまちづくりを調査しました。調査団長の鳥井さんは、そこでどのような収穫を得られましたでしょうか。

大阪版アーツカウンシル

鳥井 イギリスの文化振興施策の特徴は、『アーツカウンシル』という第三者機関があることです。日本では文化への助成金は国や自治体、企業が各団体に直接配分しますが、イギリスではアーツカウンシルがお金を一旦預かり、各団体の規模や貢献度などを評価して分配します。また、『アームズレングス』という考え方が浸透しているのも特徴です。直訳すると「腕の長さ」ですが、これは、文化や芸術に対して国や自

治体は金を出す口は出さない適切な距離を保つことを意味しています。アームズレングスが重要なのは、本来、政治家や官僚、企業経営者に求められる能力と文化の担い手に求められる能力は別物であるため、両者の間に適度な距離をおかなければ文化は発展しないからです。

私は、ユニークな製品やサービスを生むには、芸術的な創造力が必要だと思います。技術と文化は経済を支える車の両輪なんですね。マイクロソフトやアップル、グーグルなどに代表されるアメリカの先端企業には、ポップアートなどのアメリカ文化が土台にあります。私どもサントリーの例で申し上げますと、創業者の鳥井信治郎は根っからの商売人でしたが、清元など日本的な趣味がある一方、西欧のデザインへの憧れや探究心も人一倍強い人でした。毎月丸善から海外の雑誌を取り寄せ、それを切り抜いてスクラップしてはデザインを理解しようと努めていました。そうした探究心から、赤玉ポートワインをはじめウイスキーやビールの斬新なデザインが生まれ、日本で初めて水着モデルをポスターに起用するなど、話題になりました。

さて、大阪における文化振興については、イギリスのアーツカウンシルの仕組みを取り入れてはどうかと考えます。もとより行政や企業から出されるお金の配分は公平と平等が原則であり、お金が申請どおりに使われているか評価することも重要です。しかし、そもそも文化というのは無駄で非効率な面もあります。私は、このバランスを担



鳥井信吾氏

て機能するのがアーツカウンシルだと思います。さらに、「こんな素晴らしいアートがある」と知らせる企画・広報活動も必要です。お客様を集めたり、アーティストをメディアに売り込んだり、あるいは若いアーティストを発掘して育成する。そうしたマネジメントも兼ねた大阪版アーツカウンシルが必要だと思います。

堀井 フランスやイタリアでは、文化への国家からの支援が非常に大きなウエートを占めています。文化を国家の命題として正面から捉えているのです。一方、アメリカでは、行政は一切文化に関わらず、民間が支援しています。その代り文化に対する寄付は税制上非常に優遇されています。スコットランドはその折衷型というか、国や自治体の助成金と企業の協賛金や市民の寄付、さらには文化支援宝くじの発行など、官民による総合的な文化支援システムであり、そのなかでアーツカウンシルが非常に大きな役割を

担っています。各国それぞれ特徴があるのですが、翻って日本はどのようなのでしょうか。

芸術鑑賞が社会の力になる

近藤 各国の国家予算に占める文化予算の割合(2009年)を見れば、アメリカ0.03%、イギリス0.24%、フランス0.81%、ドイツ0.39%、韓国0.73%といずれも比較的少ないです。とくにアメリカは堀井さんがおっしゃったように政府支援はゼロに近く、民間の寄付で賄っている。逆にフランスと韓国は政府がかなり支援している。これはどちらが良いということではなく、政府ないし民間が必要なお金を文化・芸術に回せば良いということです。

一方、日本では、政府の文化予算は0.12%で、GDPに占める寄付の割合も0.13%と非常に低い。これでは日本の文化力が世界に浸透しません。ではどうしたらいいのか。お金を出すのは政府か自治体か、それとも民間企業か財団の寄付か。私は最終的に文化・芸術にお金が必要なだけ行き渡りさえすれば、それがどこから出ようとかまわないと思います。ただし、伝統芸能のように必ずしも多くの一般人や若い人に好かれているわけではないものを維持するためには、やはり国や自治体がお金を出して守るべきでしょう。

問題は助成金をどうやって適正に配分するかですが、文化庁でも2011年からアーツカウンシルに相当する制度を導入しました。文化庁は日本芸術文化振興会に助成金の一部の配分を委託していますが、その配分を文化庁が決めるのではなく、アームズレングスの考えに則って実質的に専門家が決めています。今後はこうしたシステムを広げ、公的資金がより一層適正に配分されるようにしたいと思っています。

大阪府がアーツカウンシルを導入されるのは大歓迎です。その際は政治的中立性が大事で、知事や市長が交代しても必要なところに必要なお金が回るようなシステムであるべきです。また、何より国民一人一人が芸術・文化を大切に、それを生活のなかに取り入れ楽しむべきでしょう。パリやニューヨークでは、定時に仕事を終え、「これからオペラに行く」と言えば皆喜んで送り出してくれます。これを日本の職場で言えば、シラッとした雰囲気になりそうですね。文化を楽しむことは単に個人の趣味ではなく、社会の力になるんだという意識改革が必要だと思います。そうしないと文化にお金が集まらないし、集ったお金をうまく利用することもできません。日本には文楽、能・狂言、歌舞伎といった素晴らしい伝統文化があるのに、それを支えようという一人一人の意識が低い。定時に仕事を終えて芸術・文化を楽しむ生活が、日本の再生につながると思います。

なぜ文化を楽しまないのか

堀井 かねがね疑問に思っていたのですが、江戸時代末

期から明治時代にかけて来日した外国人は、日本人の素晴らしい美的センスに驚嘆したそうです。ヨーロッパを中心にジャポニズムという日本文化ブームも起りました。そうした日本が、なぜかもわずかな文化予算しか捻出できない国になり、生活のなかに芸術・文化を鑑賞する習慣が根づかなくなってしまったのでしょうか。



堀井良殿

近藤 理由は二つあると思います。一つは明治の富国強兵策と戦後の経済成長優先策の行き過ぎによって、文化を楽しむのはお金儲けの後でいいという考えになってしまったこと。二つめはクラシック音楽や油絵などの西洋文化を取り入れることが主眼となり、学校教育でも日本の伝統的な音楽や芸能などが隅に追いやられてしまったことです。そのため伝統文化を理解するチャンスが与えられず、語る場もなくなってしまった。だから文楽を一度見て面白くなかったというだけでその価値を認めないような市長さんが生まれる国になってしまった。じつに残念なことです。

堀井 強兵策は戦争で、富国策はバブル崩壊で結局失敗しています。その結果が現在の混迷状況なのですが、『和魂和才』で再出発して、新しい時代をつくる今が節目かもしれませんね。

近藤 同感です。ただし和魂和才は大いに結構なのですが、あくまで近代モダニティの中で日本の良いところだけを復活させるよう注意しなければなりません。かつて『近代の超克』（1942年に雑誌『文学会』のシンポジウムで主張された、近代西洋文明が日本の閉塞感を生んでいるという問題提起）が、極端なナショナリズムによって日本文化を世界に広めようと意気込み過ぎ、欧米との戦争を正当化してしまったことを教訓とすべきです。大事なことは、西洋近代と日本古来の魂の両方の良いところを一緒にすれば、こんなに良い社会ができるんだということを日本人自ら実践してみることです。

堀井 教訓を生かし新しい道を拓こうということですね。大竹さんは、文化経済大国への道を拓くために、具体的にどのような取り組みをすればよいとお考えでしょうか。

日本文化を関西から世界へ

大竹 関西には、日本の国宝の約半数、重要無形文化財保持者（人間国宝）の約2割、文化財の保存技術者の約6割がいます。関西は日本の歴史・文化の集積地であ

り、内外に発信できる特別な立場にあるわけです。こうした背景から、私は、文化経済大国の実現に向けて関西が取り組むべき四つの提案をいたします。

一つめは、日本語だけの『KANSAI・日本文化サミット』の開催です。2006年に『日本語・日本文化世界会議（NPOジャパン・リターン・プログラム）』の第1回がカイロで開かれ、第2回（2007年）は北京、第3回（2011年）は東京で開催されました。こうしたサミットを関西で開催することで、世界に日本文化ファンを増やしていこうという提案です。二つめは、日本文化を内外に発信する『和使（わのつかい）』を育成する組織の設置です。三つめは、関西国際空港を日本文化のゲートウェイとし、ここに伝統芸能や和室、庭園など、日本の文化や生活様式が体験できる環境を作ってはどうかと考えます。四つめは、文化庁や文部科学省といった文化政策を担う国の機関を一部関西に移し、文化経済活動の中心を関西が担うことです。日本の歴史・伝統の象徴ともいべき皇室の方々にも、一部関西にお移りいただいても良いと思います。東京に集中している現状では、大地震による甚大な影響が危惧されますからね。

堀井 ご提案の中からはまず何か一つでも実現できればいいと思います。鳥井さんは具体的にどのようなお考えがあたりでしょうか。

大阪城フェスティバル

鳥井 イギリスの文化振興視察では、スコットランドの首都・エジンバラで毎年開催される『エジンバラ・フェスティバル』も調査しました。当地では1年を通して音楽やアート、科学など12のフェスティバルが行われ、7～8月にピークを迎えます。町のシンボルであるエジンバラ城を中心に歴史の趣きを感じる旧市街で5つのフェスティバルが同時開催され、期間中は人口48万人の町が100万人に膨れ、約175億円の経済効果と5,420件の雇用が創出されるそうです。国際的な知名度も高く、世界中から約2万人のアーティストと2,000人のメディア関係者が集り、1,000人近



エジンバラ市街

いプロデューサーが新人発掘のためにやってくる。さらに自由参加、自主公演のフリンジ(周辺)フェスティバルがあり、若いアーティストの恰好の発表の場となっています。彼らにとって発表の場は非常に重要で、フェスティバルがアーティストを育てる良い機会となっています。

アーツカウンシルが芸術・文化へお金を分配するのは良いのですが、アーティストにとって発表の場がないと意味がありません。私は、大阪には大阪のシンボル、大阪城があるのですから、これをもっと活用して、芸術・文化の発表の場となる『大阪城フェスティバル』の開催を提案いたします。

堀井 じつは7年前から、大阪城サマーフェスティバルの一環で、大阪城西の丸庭園に特設舞台を組み、ライトアップされた天守閣をバックにコンサートや演劇を上演する社会実験を行っています。また、大阪の夏といえば住吉大社の御田植神事をはじめ、枕太鼓で知られる生國魂神社の夏祭りや生根神社のだいがく祭りなど、長い歴史のなかで連綿と続く祭りがあります。こうした伝統祭事や新たな創作活動がバラバラに存在するよりも、エジンバラ・フェスティバルのようにまとめて結び付けることで大きな文化力となり発信力も高まるでしょう。今日の会議がそのきっかけになればと思います。

神が宿る日本の伝統文化

小出 地域の祭りは、人と人を結び付けるコミュニケーションの一つだといえます。農村にしろ、町にしろ、かつてはその中心には氏神様がいて、それを中心に人々がつながりをもっていました。しかし戦後、政教分離という言葉が一人



住吉大社の御田植神事 (2011年6月14日/大阪市住吉区)

歩きして、宗教と公の行事を分けるという意味が曲解されてきました。宗教という概念はもともと日本にはなく、海外から入ってきた概念にすぎません。狂言や能などの伝統芸能や、刀鍛冶のような伝統技術には神を奉る動作がありますし、相撲でも行司が土俵をお祓いします。つまり日本の伝統文化と神事は密接な関係にあり、文化をもって内外に発信・交流しようとする今こそ、日本人のアイデンティティである『まつりごと』を再認識しなければならないと思います。

堀井 「面白い」という言葉は、「神様の顔(面)が白く見える」に由来し、神様に降臨して楽しんでいただくため、演技を奉納するという意味があるそうです。芸事の出発点には、やはり神様がおられると思います。

そこで、本会議でのご提言にもとづく合意事項を『中之島宣言』としてまとめ発表させていただくのですが、今回は住吉大社のお祓いを受けて和泉流狂言師の小笠原匡さんから奏上していただきたいと思います。

(『中之島宣言』は次ページに掲載)

パネリスト

大竹伸一(おおたけ しんいち) 西日本電信電話(株)代表取締役社長

1948年愛知県生まれ。71年京都大学工学部電気工学科卒業後、日本電信電話公社入社。2007年西日本電信電話(株)代表取締役副社長戦略プロジェクト推進本部長を経て08年より現職。10年関西経済同友会 代表幹事。

小出英詞(こいで えいじ) 住吉大社権禰宜

皇學館大学文学部神道学科卒業。住吉大社で神職を務める一方、地域の歴史・文化を広める活動を精力的に展開。郷土史サークルや町歩きイベントにも関わり、数々の講演活動を行う。社報や地域誌などにも多数執筆。

近藤誠一(こんどう せいいち) 文化庁長官

1946年神奈川県生まれ。71年東京大学教養学部教養学科卒業。72年外務省入省。73~75年英国オックスフォード大学留学。在米大使館公使、ユネスコ日本政府代表特命全権大使等を歴任。2010年7月より現職。

鳥井信吾(とりい しんご) サントリーホールディングス(株)代表取締役副社長

1953年生まれ。75年甲南大学理学部卒業、79年南カリフォルニア大学大学院修了。83年サントリー入社、2003年副社長就任、現在に至る。サントリー芸術財団代表理事、関西経済同友会 歴史・文化振興委員長、12年5月関西経済同友会 代表幹事。

(50音順・敬称略)

コーディネーター

堀井良殷(ほりい よしたね) (公財)関西・大阪21世紀協会理事長

1936年奈良県生まれ。1958年東京大学卒業、同年NHK入社。ニューヨーク特派員、大阪放送局長等を歴任、2001年より現職。水の都大阪再生運動を提唱・推進。心学明誠舎理事長、関西経済同友会 水都大阪推進委員長、大阪文化祭賞運営委員会会長等。

特別公演で『三番叟』を奏上 和泉流狂言師 小笠原 匡さん

関西・大阪文化力会議のパネルディスカッション終了後、特別公演として和泉流狂言師の小笠原匡さんに、狂言『三番叟（神楽式）』と、当会議での合意事項『中之島宣言』を奏上していただきました。

関西・大阪 21 世紀協会はこれを広く市民や行政、企業などに呼びかけていきます。



小笠原匡さん
公益社団法人 能楽協会会員 大阪支部所属
日本能楽会会員 重要無形文化財総合指定保持者

中之島宣言

参らせ候 参らせ候。敬つて申す。

それ東アジア諸国は、其多様性が故、様々な危うさを孕むもの也。安定と平和の為には、日本は広く海外に目を向け、他国の多様性をしかと心得るべし。

文化交流を育み、相互理解を深める事、いとやむごと無き、事也。

また、市場主義一辺倒なる事無く、とこしえより培いし、日本の心と呼び起こし、震災復興、企業の営みに生かすべし。是こそ日本の魅力。他国に理解せしむは、是、世界から敬愛される国作りの戦略なり。

古への昔より、文化・芸能には神々が宿り、国や都市、まらを元気にする力あり。民が文化を楽しむまら作り、いと、肝要なり。都市は舞台なり。我が国発祥に由来す上町台地、大阪城に万国より歌舞音曲に秀でたる者集いし舞台を創る事、天地も共に是を喜び、大阪蘇りし術なり。

「民」は、町衆精神を發揮し、文化を支える元手集めの仕組みをつくる。
また「お上」は、支援はしても物は云わぬ「不即不離の隔たり」を保つなり。これぞ官・民円満の秘訣なり。

此如く浪速の地より事始め。
萬民ともに力をつくすべし。
萬民ともに力をつくすべし。

平成二十四年四月二十五日
関西・大阪文化力会議



大阪21世紀協会賞受賞 河野里美さんの作品を展示

会場となった大阪国際会議場 10 階ロビーでは、影絵アーティストの河野里美さんの作品が展示され、来場者の目を楽ませました。河野さんは、アートストリーム 2011 in 心齋橋で大阪 21 世紀協会賞を受賞。当会議のポスターやプログラム用の作品も制作していただきました。関西・大阪 21 世紀協会は、優れた新進アーティストに、こうした発表の機会を得ていただくなどの支援を行っています。(p29 に記事)



河野里美さん

大阪芸術大学芸術学部映像学科卒業後、2005 年より独自でカラー影絵の創作活動を開始。個展、広告、映像制作、ワークショップなどで活躍。大阪府在住。